

高齢診療科

● スタッフ（2020年10月1日現在）

診療科長 清水 聡一郎
 医局長 平尾 健太郎
 病棟医長 高田 祐輔
 外来医長 金高 秀和

医師数 常勤 14 名
 非常勤 3 名

● 診療科の特徴

超高齢化社会を迎える我が国において、国の基本的な方針としての健康寿命の延伸や活力ある長寿社会の構築が求められており、老年医学の位置づけはますます重要となっている。複数の疾患を併せ持ち、若年者とは生理学的にも大きな相違がみられる高齢者では、臓器別・領域別ではなく、より包括的・全人的な診療が求められる。高齢診療科は、「高齢者の疾患を診るのではなく、疾患を持つ高齢者を診る」ことを念頭に置きながら診療している。①75歳以上の高齢者を対象とした高齢者総合診療システムを導入、②身体面だけでなく、精神・心理面、生活機能面、社会・環境面からもアプローチする全人的医療の提供、③認知症（アルツハイマー病など）、神経変性疾患（パーキンソン病など）の高齢者神経疾患に対し認知症専門医・神経内科専門医の診療、④低栄養・転倒・嚥下障害・フレイル・サルコペニアなどの老年症候群の包括的診療、⑤救命救急センター、脳神経外科、脳神経内科と協力し、脳卒中の超急性期ならびに急性期治療を積極的に行っている。

● 診療体制と実績

1) 外来診療体制と実績

地域医療機関との「認知症ケアネットワーク」を構築し、病診連携を積極的に推進し、かかりつけ医との病診連携体制を確立している。本年度の初診患者総数は831名であり、そのうち、もの忘れを主訴とする初診患者は431名、その約65%が地域医療機関からの紹介患者となっている（図1）。多くはアルツハイマー病であるが、その他の疾患も多い。（図2）身体所見、一般検査（血液検査、髄液検査、生理機能検査）、神経心理検査、画像検査結果を総合的に判断して、正確な診断、適切な治療を行っている。2015年9月に東京都より当院は「認知症疾患医療センター」に指定されており、本年度より櫻井博文教授がセンター長を兼任し、東京都区西部二次保健医療圏における地域連携型センターとして認知症の早期診断と対応に貢献している。診断・治療だけでなく、介護においても毎月介護者教室や認知症カフェを開催し、患者のうつ予防や介護者の負担感軽減に向けた取り組みも行っている。脳卒中については、2014年5月に発足した脳神経外科・救命救急センター・脳神経内科・高齢診療科の4科で構成される脳卒中センターを核として、あらゆるタイプの脳血管障害に対応し、認知症・神経疾患以外でも75歳以上の高齢者の多種多様な内科疾患を幅広く診ている。

2) 入院診療体制と実績

高齢者の診療は、身体面だけではなく精神心理面、生活機能面からも総合的な評価が必要となることから、高齢者総合機能評価ツールを用いて院内の高齢患者の機能評価スクリーニングを行っている。本年度の延べ入院患者数は378名。図3に入院となった原因疾患の割合を示す。入院の原因となる疾患は多岐に渡るため、全人的な質の高い診療を提供するよう努めている。他科の入院患者に対しても2018年4月より認知症ケアチーム（認知症認定看護師、認知症専門医、MSW）による回診を行い、認知症悪化やせん妄の予防、身体疾患の治療を円滑に受けられるよう指導を行っており、2019年10月よりADLやモチベーション維持の目的で院内デイサービスを行っている。

図1：外来初診患者の疾患別割合

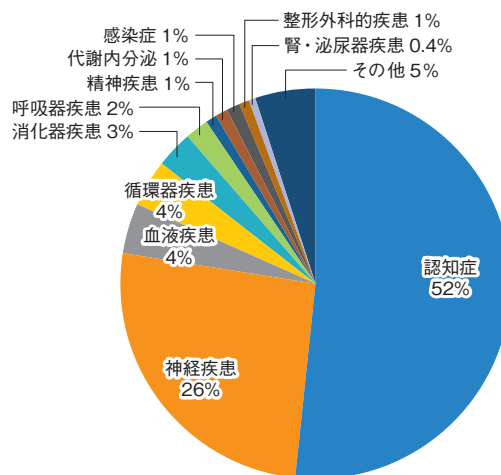


図2：“もの忘れ”の内訳

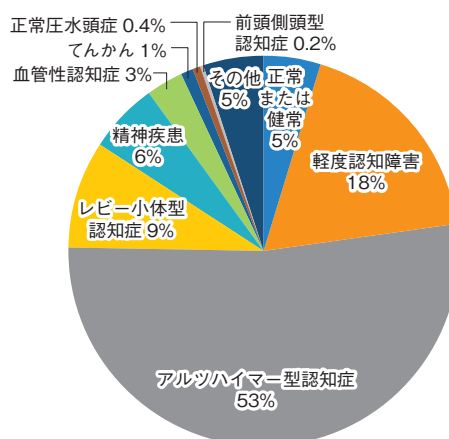


図3：入院患者の原因疾患別割合

